

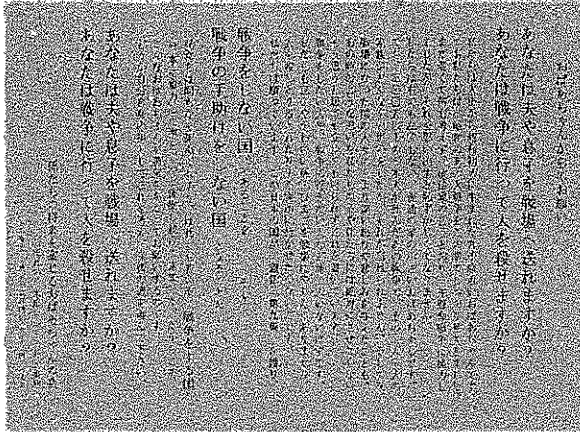
おばあちゃんの手紙

夫・息子を戦場へ送れますか？

戦争に行つて人を殺せますか？

戦争法案をめぐる情勢が緊迫するなか、「孫たちの将来を案じるおばあちゃんの会」をつくる関西の高齢女性たちが、実名で思いをつづったチラシを多くの人に手渡しています。

「おばあちゃんからのお願い」と題したチラシは、「三〇〇万以上の日本人が死んだあの戦争で、その一人一人の家族がどんな辛い思いをしたか：私たちは願っています。」



㊤「孫たちの将来を案じるおばあちゃんの手紙」のチラシ
㊦「おばあちゃんの手紙」の井上美地さん。自宅の庭で＝西宮市毘沙門町

関西の高齢女性たち チラシに思いつづる



この日本の国が、憲法「第九条」を護り、戦争をしない国であることを！そして、戦争の手助けをしない国となることを！」と訴えるとともに、「戦争をする国日本に協力したことをずっと後悔し続けて来ました。…あなたは夫や息子を戦場へ送れますか？あなたは戦争にいつて人を殺せますか？」と問いかけています。

同会は、兵庫県西宮市の井上美地（本名・浅尾充子）さん（87）、神戸市東灘区の公庄れいさん（85）、大阪府岸和田市の永原テル子さん（89）の3人が第1次安倍政権のときにつくったもの。当

時作成した3人の名前入りチラシを今年になって新しくしました。

井上さんは歌人で、西宮歌人協会会長を務めています。戦時中、兵庫県立第一高等女学校で学び、本来5年で卒業ですが戦時措置で1945年に4年で卒業。直後に学校は神戸大空襲で焼失しました。

「いっぱい勉強したいと思って入学しましたが、授業はほとんどなく、教室でゼロ戦のエンジンコイルを巻いたりしていました。『お国のために』という気持ちで、模範的な戦時女学生だったと思う」とふり返ります。

再び安倍政権が発足したとき「もうダメだ」と思いましたが、戦争法案反対の運動の高まりに「日本も捨てたものじゃない」といいます。

歌会などでチラシを手渡します。「家で読んで、おばあちゃんがこんな書いたんだとみんな話合合ってほしい。それでどうするか自由に決めてほしい」と語ります。